

石郡英一の

## “老話”

介護職に聞いてほしい  
高齢者と家族の物語

## 第8話

## 老いらく

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日経研出版）がある。

## 1. 恋の詩

時計の針は4時50分を指している。4月の朝はまだ明けていない。

ドアの隙間から明かりの漏れる部屋の扉を、巡回に訪れた介護士が静かに開けて部屋を覗くと、男性がベッドの端に腰掛け、サイドテーブルの上で、便箋に筆ペンを走らせていた。

介護士はそっと部屋に入って男性に近付くと、声を押し殺して男性に挨拶した。

「おはようございます。早くから起きてお手紙をお書きですか？ もう少しお休みになってはいかがですか？」

男性から返事はなかった。

介護士が便箋を覗き込むと、そこにはなかなかの達筆で詩が書かれていた。しかし介護士は書かれている詩の内容には触れずに、すっと踵を返し静かに扉を閉めて部屋から出て行った。

書き物をしていた男性は、昨日このグループホームせせらぎに入居してきたばかりであった。せせらぎでは職員を含めて唯一の男性であった。

せせらぎの朝は早い。5時に夜勤の介護士が最後の巡回を終えると、朝食の支度にとりかかり始め、7時には朝食が始まる。入居者も6時を過ぎると、介護士が起床を触れ回らなくても、味噌汁の香りにつられて、居室から出てユニットの食堂ホールに集まってくる。

しかしこの不文律に馴染みのない男性は、食事がテーブルに整えられても、一向に部屋から出てこようとしなかった。

そこで介護士が男性を呼びに行くと、男性は部屋の中をうろうろと歩き回っていた。「朝食の準備が整いましたので、食堂ホールにお越しく下さい」

介護士が声をかけると、男性はサイドテーブルに置かれた封筒を持って部屋を出た。

「昨日の夕食の時にも説明したと思いますが、この席が食事をする時のあなたの席ですので、覚えておいてくださいね」

介護士はそう云うと、4人掛けのテーブルが東西に2つ並べである、西側テーブルの西南角のいすに男性を座らせた。

男性が席に座ると、介護士の「いただきます」という挨拶と共に、皆が一斉に食事を摂り始めた。食事を摂り始めてから程なくして、男性は東側テーブルの北西角に座っている女性の後ろ姿をじっと見つめた。

あらかた食事が終わり、一人また一人と席を立つと、食堂ホールにはその男性と、男性の見つめる先の女性だけが残された。介護士は忙しそうに食器を片付けている。

すると男性はおもむろに立ち上がり、いすに座っている女性に近付いた。

「ケイコさん、やっとお渡しすることができました」

そう云って男性は手にしていた封筒を女性に手渡した。女性は手にした封筒を静かに開け手紙を広げると、そこには百人一首の詩が記されていた。

『君がため 惜しからざりし命さへ 長くもがなと 思ひけるかな』

その詩を黙読した女性は、にっこりと微笑んで男性の耳元でささやいた。

「玉の緒よ 絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする……ありがとうヨシタカさん」

## 2. ケイコ

### (1) 視線

「おはよう！」

久保恵子が走って駅のホームに駆け込んできた。

「おはよう！ 恵子，2学期もまたギリギリのスタート?!」

親友の千賀子と貞子は，異口同音に返事を返した。

「ごめん，ごめん！ さあ乗るよ！」

そう云うと恵子は，発車5分前からホームに着いている列車に2人を誘った。するとまるで恵子が来るのを待っていたかのように列車のドアが閉じた。

1958年9月。久保恵子は高校3年生で，最後の夏休みを終え，進路に悩む日々を終止符を打たなければならない時期に入っていた。

恵子の家は林業に携わる家系で，父は材木を扱う会社を経営していた。両親は恵子が一人娘ということもあり，高校を出た後は家事の手伝いをさせ，早めに然るべき人物を婿養子として迎え入れたいと願っていたが，恵子は古文が好きで，漠然と大学への進学を希望していた。

千賀子と貞子は，それぞれが就職を希望していた。

「恵子，進路は決まったの？」

電車が走り出して開口一番に千賀子が問うと，恵子は面倒くさそうに頭を振った。すると，3人の間にばつの悪い空気が流れ，暫しの沈黙が訪れた。

その時恵子が顔を右後ろに逸らすと，右斜め後ろから鋭い視線を感じた。そこには，1両後ろの車両の左側ドア付近に立ち，恵子を見つめる純真可憐な青年の視線があった。

それからというもの恵子は，電車に乗るたびに視線の彼が気になり始めた。しかし，だからといって，それ以上何の進展があるわけでもなく，その思いは恵子の胸に収められたままいつしか時は過ぎた。

そのうち10月になっていよいよ進路を決めなければならぬ時期が訪れ，恵子は迷った揚げ句，両親の意見に従い家事手伝いを選択した。

高校3年生にとって，10月以降から新年度が始まるまでの月日は，就職試験，卒業試験，卒業式，新しい生活への移行など目まぐるしく推移する。

恵子も例外ではなく，忙しい毎日を過ごしたが，毎日の通学電車で繰り返される，純真可憐な青年の視線だけが癒されるひと時だった。しかし，結局視線の彼とは一度も口を利くこともなく，恵子は慌ただしく3学期を終え高校を卒業していった。

高校を卒業してからの恵子は，実家の材木会社の事務を手伝いながら家事手伝いをこなすという，忙しい毎日を過ごした。そのうちに高校時代に抱いた密やかな思いもいつしか胸の奥にしまい込まれていった。

### (2) 奇跡

恵子が成人式を終えると，父は待っていましたと云わんばかりに，しきりに見合い話をもってくるようになった。

1年目は10件，2年目も10件，3年目は12件も見合いの話が来たが，いずれの話も恵子は乗り気になれず逡巡した。

結局32件の見合い話を1度も受けることがなかったため，父はどうとう立腹し，その後見合い話を持ち込まなくなった。

しかし恵子が24歳になった時，業を煮やした母が父を説得し，自らの友人に誰かよい人がいたら紹介してほしいと頼み込んだ。すると，恵子より2歳年下の藤原義隆という青年を紹介してくれた。

藤原義隆は，今年一流大学を卒業したが，やりたいことが見つからないため就職する気がなく，家でゴロゴロしているという。「両親共よい方だね。特にお母様が，義隆ちゃんも誰かいい人と出会えば，人生も変わるのではないかと期待しているのよ。そこで，恵子ちゃんは気立ても器量もよいので，姉さん女房にはぴったりのような気がして，いかがなものだろうかと思って紹介した次第なの…私はよい話だと思うけどねぇ…」

母の友人は母にそう伝えると屈託なく笑った。

母は早速その晩，恐る恐る恵子に見合いの話を持ちかけてみた。すると案の定，恵子の反応

は鈍かったが、一応写真だけでも見てみないと勧めて写真を見せたところ、恵子の表情が一変した。

『こんなことって本当にあるのかしら…この純真可憐な瞳…昔とまるで変わっていない！ 彼だわ！ 奇跡としか思えない！』  
「お見合い受けてみる？」

母は恵子の輝く瞳から、恵子の思いが叶ったことを悟った。

### 3. ヨシタカ

#### (1) 初恋

1958年6月。藤原義隆が高校に入学してから2カ月が経った。義隆の通う高校は男子校で、義隆は高校まで、毎日最寄り駅を7時35分に発車する電車に乗って通学していた。

入学してしばらくは、義隆は緊張のためか周りが見えずにいたが、1カ月が経った頃から周りが見え始めてきた。すると、毎日同じ時刻の通学電車の中で会う、お提<sup>さげかみ</sup>髪<sup>かみ</sup>の女子高生に目を奪われるようになった。

その彼女は毎日、義隆の乗る1両前の車両の進行方向右側ドア付近に立ち、手摺にもたれるように窓側を向いて乗っていた。毎日後方車両の左側ドア付近に立つ義隆からは、右斜め後ろから彼女を眺める形になった。

彼女の着ている制服から、彼女は沿線にある女子高校の生徒だと分かる。また、自信に満ち溢れた態度や制服の着慣れた感じから、義隆より上級生であ

ることは間違いなさそうである。

また彼女は毎日、同級生と思われる同じ制服を着た女子高生2人と共に通学しており、その仲間から「ケイコ」と呼ばれていた。

ケイコは当時としては大柄で、ほかの2人より頭一つ飛び抜けており、1m56cmの義隆以上の背丈があるように見えた。ケイコの制服姿はバランスが取れてよく似合っていた。そのため、義隆の位置から見るケイコの姿は、まるで菱川師宣の見返り美人図のように見えた。

しかし、義隆のケイコへの関心は、何かを望むというのではなく、見返り美人図を眺めるかのような密やかな楽しみであったため、それ以上何の進展もないまま時は過ぎ、いつの間にか夏休みに入った。

義隆の夏休みは、ケイコへの関心を忘れるほど忙しかった。

義隆は剣道部に所属していたため、夏休みは毎日、6時30分から8時30分まで行われる朝稽古のために、普段より早い時間の電車で学校に通った。さすがにその時間の電車は座って乗ることができた。

また、朝稽古を終え、先輩の道具の後片付けや道場の掃除を終えると、剣道の防具を購入する資金を貯めるため、家の近所にある食堂で、10時から20時までアルバイトに勤<sup>いそ</sup>しんだ。

そのため、家に帰るのは毎日21時過ぎで、疲れて家に帰ると、

風呂に入るだけですぐに眠りに就いた。夏休み中はお盆の3日間を除いて、義隆はその生活を毎日繰り返した。

そうこうしているうちに夏休みは過ぎ、あっという間に2学期の初日を迎えた。

新学期の始まる朝、義隆は忙しい夏休みを乗り切ったという満足感と、平穏な日常生活への移行に物足りなさを感じながら、7時35分に出発する普通の通学の電車に乗り込んだ。

すると、車内には今までに見たことのない景色が広がっていた。見上げていたつり革が、目の前にあるような感じを受けたのである。夏休み中は座って乗車していたので気が付かなかったが、義隆はこの夏休みの間に、身長が10cm以上は伸びたようだ。

その高い視線で義隆は、条件反射のようにケイコの方に目をやった。すると、今まで届かなかった視線が届いたかのように、ケイコと初めて目が合った。義隆は慌てて目を逸らしたが、急に胸の鼓動が激しくなった。

その時から、義隆のケイコへの関心はより高まり、以降義隆は、毎朝の通学電車の中でケイコとのアイコンタクトを望むようになっていった。

そして、ケイコとアイコンタクトが取れるようになると、街の色彩、香りや音など、感じることでできるすべてのものが輝いているように思えた。

2学期に入って1カ月もする

と、古文の授業で百人一首を取り上げるようになった。古文を担当する担任教師は、授業中自分の好きな句と称し、一句朗々と読み始めた。

「君がため 惜しからざりし命さへ 長くもがなと 思ひけるかな……藤原義孝」

「はい！」

義隆は自分の名前を呼ばれたかと思い、返事をして立ち上がった。

担任教師は怪訝そうな顔をした後、クスリと笑った。

「藤原義隆」

担任教師がもう一度、確認するように名前を呼んだ。

「はい…」

今度は返事を返した義隆が怪訝そうな顔をした。

「藤原座りなさい。藤原義孝というのは、この句を詠んだ作者の名前だ。君と同姓同名であるということに、私も今気が付いた。ただし“よしたか”の“たか”の字が、君は“隆盛”の“隆”で、詠み人は“孝行”の“孝”だがね」

担任教師の説明を聞いて、クラス中がどっと沸いた。

「ではお聞き致します。藤原よしたかさん、あなたはどういう思いでこの句を詠まれたのですか？」

担任教師が茶目っ気いっぱい義隆に尋ねると、もう一度クラス中がどっと沸いた。

「えっ！ よく分かりません！」義隆が頭を掻きながら照れて応

えると、担任教師が続けた。

「そりゃあ照れるよなあ…この句は“あなたに逢えるならこの命さえも惜しくないと思っていましたが、いざこうしてあなたに逢うといつまでも長く生きて一緒にいたいと思うようになりました”という詩で、恋を謳った詩だからなあ…」

担任教師の説明に、クラスのボルテージがさらに上がり、義隆を冷やかす声で沸きに沸いた。この時義隆は、皆に心を見透かされたようで、赤面しうつむいた。

同時に義隆は、この句からケイコを連想しときめいていた。今まで経験したことのないその感情に、ぼんやりと『これが恋なのだろうか？』と感じていた。そしてこの時から義隆のケイコへの思いは、より強いものへと変化していった。

## 〈2〉奇跡

百人一首の授業によって自らの気持ちに気づき、ケイコへの思いをより強くした義隆であったが、ケイコに思いを打ち明けるには勇気と自信が必要だった。

そこで義隆は、今度の春から夏に向けて行われる、新人戦・インターハイの区の大会において、個人戦で3位以内に入ったらケイコに思いを打ち明けようと、自分にノルマを課した。

剣道場の壁には「稽古に勝る近道なし」と教訓が掲げられているが、義隆は心の中で『ケイコに伝える近道なし』と、勝手な注釈をつけて自らを鼓舞するよう

にした。

そのため、年が明けてからも義隆は懸命に練習に励んだ。そのやる気と自信は、日増しに電車の中でのケイコとのアイコンタクトを、憧れから愛情へと変化させていった。

春休みを終え4月になると、義隆は2年生に進級した。義隆は新人戦でよい成績を収めて、今年こそケイコに告白するぞと気合を入れていた。何より今までの電車でのケイコとのアイコンタクトが励みと自信になっていた。

ところが新学年が始まると、あろうことか通学電車の車両からケイコの姿が忽然と消えたのである。

初めのうちは『体調を崩したのだろうか？』とか『通学の時間を変えたのだろうか？』などと考えてみたのだが、1週間もたち、一緒に通学していた友達も見当たらないことを確認すると、ケイコは去年3年生で、卒業してしまったのだという事実を認めざるを得なかった。

『駄目でもともと。なぜ告白しなかったのだろうか？ ケイコという名前しか知らない人をどうやって探せというのだ…』義隆は自分の臆病風を悔いた。

ケイコの姿が見えなくなっただけからというもの、義隆は人生のピースが欠けてしまったかのように心にぽっかりと穴が開き、ピースのかげらを探すかのように心が彷徨った。

義隆のピースを探す心の旅は、その後も続いた。剣道は高校2年の新人戦・インターハイ予選のいずれも2回戦で敗れ、才能のなさを痛感して秋には剣道部を退部した。

大学進学は特に希望がなかったため、担任に勧められた大学を受験したところ、合格した。入学後に詩吟や落語研究会など文科系サークルを転々とするが、どれも長続きはしなかった。結局何げなく過ごした4年間の大学生活は、あっという間に卒業を迎えた。

大学に通っても、何もやりたいことが見つからなかった義隆は、就職も拒否して、やりたいことが見つかるまで、暫くは家で過ごすことにした。

すると大学を卒業した年の7月、義隆の母の女学校時代の友人から、ケイコの婿養子の話が舞い込んできた。

母がその見合い話を義隆にすると、義隆は否定も肯定もせずぼんやりと話を聞いていた。「相手の写真はあるの？」

義隆が面倒くさそうに母に問うと、母は満面の笑みで写真を差し出した。

「あるわよ。とても器量がよくて聡明な感じのお嬢様よ」

義隆はその写真を見て、雷に打たれたような衝撃を受けた。『こんなことが本当にあるのか…ケイコさん！ 奇跡としか思えない！』

「お見合い受けてみる？」

母は義隆の輝く瞳から、義隆の思いが叶ったことを悟った。

## 4. 君がため

見合い話が生じて1カ月も経たないうちに、藤原家と久保家は、老舗料亭でお見合いを行った。

義隆は紺のスーツと赤いチェックのネクタイ姿で、恵子は赤い地に白の花模様があしらわれた振袖という出で立ちで現れた。

型通りの挨拶が終わると、仲人が両家の親は席をはずして義隆・恵子の2人で話すよう勧めた。

2人きりになると、6年前の2人に戻っていた。

「6年前…電車であなたを遠くから見つめておりました。その時から私は、ずっとあなたに伝えたいことがありました…」

義隆は6年前に失くしたピースをゆっくり慎重に拾い上げ、心の穴を埋めるべく、恵子への思いを代弁した詩を手紙したたに認め、恵子に手渡した。恵子が手紙を広げるとそこには義隆と一文字違いの歌人藤原義孝の詩が書かれていた。

『君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな』

古文が得意だったケイコはその意を汲み、一粒の嬉し涙を流すと手紙の応えをこう返した。

「玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱り

もぞする」(私の命よ、絶えてしまうのならば絶えてしまえ。このまま生き長らえていると、耐え忍ぶ心が弱くなってしまから)

義隆もこの意を汲み、瞳を閉じて恵子の手を握りしめた。

2人に後の言葉は要らなかった。これだけで十分2人はつながることができた。

それから半年後、2人はめでたく挙式の運びとなった。

結婚してからの義隆は、姓こそは藤原と名乗ったが、久保家に婿入りし懸命に働いた。その後2人は1男2女を授かると、家族のためにとさらに懸命に働いた。その夫婦の円満ぶりは人から羨望の眼差しで見られるほどだった。実際2人は心の底から愛し合い、この上なく幸せだった。

## 5. 再会

時は流れ、2011年に70歳になった恵子は物忘れ、昼夜逆転、徘徊、迷子を繰り返すようになり、病院を受診したところアルツハイマー型認知症と診断された。

義隆は2世帯住宅を建て同居している息子の悟夫婦と相談の上、恵子をグループホームせせらぎに入居させることにした。

義隆は45年も同居してきた妻と離れて暮らすことに寂しさと不安を抱かずにはいられなかったが、認知症の周辺症状が酷くなってきている恵子の面倒を、息子夫婦に負わせるわけに

はいかないと思い、断腸の思いで入居を決断した。

恵子がグループホームに入居して1年が経った頃、後を追うように義隆にも認知症の兆候が現れてきた。病院を受診したところ、恵子と同じくアルツハイマー型認知症と診断された。それからしばらくはなんとか自宅での生活を継続できていたが、しだいに物忘れが酷くなり、自宅での生活が困難となったため、息子の悟は、母のグループホーム入居の際にお世話になったケアマネジャーに相談した。

「自宅で父を介護することが難しくなってきたので、母と同じグループホームに入居させたいのですが…。息子から見ても仲のよい夫婦だったので人生の最期も一緒の方がいいと思ひまして」担当のケアマネジャーは、「お母様の物忘れはかなり進行しています。同じようにお父様の物忘れもかなり進行していますので、一緒にグループホームに入居しても果たしてお互いのことを覚えているかどうか…」と話すが、悟は『あれだけ仲のよかった両親だから、何かきつ

かけさえあればきっとお互いのことを思い出してくれるはず』と確信し、入居させることを決断した。

かくして義隆と恵子は同じグループホームで生活することとなった。

その結果は、悟の読みどおりであった。再会を果たした2人は、まるで赤い糸で結ばれているかのように魅かれ合い、義隆は恵子への2度目のプロポーズを果たしたのである。

まだ、2人の2度目の新婚生活は始まったばかりだ。